
ダブルダンク

バスケットマン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ダブルダンク

【Nコード】

N3919S

【作者名】

バスケットマン

【あらすじ】

湘南高1年井上彰がインターハイをめざし、高校バスケットに命を懸ける

汗にまみれた青春ストーリー！

波乱の入学式

今日は、念願の湘南高校の入学式だ！

湘南高校はバスケの名門だ。

学校に着くと、中学時代のライバル林田と安田が下駄箱で俺を待っていた。

林田「おう、これからもバスケ頑張ろうぜ」

彰「おう、テメーとは終生のライバルと思ってるぜ」

林田「俺は思ってるねーけどね！」

彰「お前が威張れんのは今だけだぞ・・・」

林田「勝手に言ってるな」

安田「林田のたっちゃんが井上彰ごときに負けないでしょ、クス」

彰は無視してそこを立ち去った。

林田は身長202センチのセンターだ。

安田は身長170センチのポイントガードであった。

2人とも中学時代かなり名をはせていた！

2人は同じチームで橋中出身だった。

自分の出身校は和光中だった。

ポジションはパワーフォワード、自分でいうのもなんだが結構うまくいったのだ！

自分のプロフィールを書くと、身長190センチ体重79キロ名前は井上彰。

教室に着くと1年A組だった、そこにはなんと中学最強プレイヤー沢西がいた・・・

彰「テメーも湘南に来てたのか？」

啓治「わりののかよ」

彰「いや、テメーぐらいになれば、この辺の高校のほとんどからオファーが来てたはずじゃねーか」

啓治「ここが一番家に近かったからだよ！」

彰「そうかい、でもテメーにも負けねー覚悟で湘南来てるからよ、レギュラーはとらせねーからな」

啓治「・・・」

彰「そっぴや、安田と林田は何組だったんだろっな・・・」

ここで沢西について説明しよう、沢西は川女中出身のスマールフォワードである。

去年の夏季中体連優勝をたった一人で成し遂げた超人であった・・・一試合平均得点90.56であった。

彼は小学校の頃からアメリカにバスケ留学していたのだった。

ポジションはシューティングガード、身長188センチ体重75キロオフェンス、ディフェンス、アスレチックすべてにおいてトップクラスの選手であった。

そして放課後監督の高下先生に入部届を出しに行くと、そこには山のように入部届が積まれていた。

体育館に行くとならぬに林田と安田の仲良し組が1on1をしていた。それは圧倒的身長差で勝つと思われた林田と安田は互角に渡り合っていた。

林田のブロックを悠々とかわしスリーポイントラインからシュートを打った・・・

「パスッ」

しかし林田も負けていないインサイドに持ち込むと圧倒的な強さを誇った・・・

フリースローラインからジャンプした、ダンクだ・・・

「ガードンードン」ボールが転がる。

見ていた僕の後ろに気配を感じた。

高下「今日は部活はないぞ！」

まだリングは揺れている、高下は聞いた

「誰だ、 Dankしたの？」

林田「僕です」

高宮「そうか・・・早く帰れよ」

3人「はい!!」

山本の脅威しかしそれをも勝る沢西の恐怖

高下「一年こっちに集まれ」

一年「うっす」

高下「今から一年だけで試合をする」

さっそくチーム決めが始まった。

チームAは俺となんと沢西が選ばれた。

チームBは林田とか

チームCは安田とか

チームDは期待の新人といわれている山本がいた。

山本というのは、山本明紀・身長200センチ体重95キロの大型選手だ。

中学まではラグビーをしていたのだがこの辺には、あまりラグビーの名門はなかったのだ。

そこで山本は湘南バスケット部に入部したのだった。

EとFに主だった選手はいなかった・・・

一回戦はチームCと当り沢西の個人プレイと彰のリバウンドなどで

75対53で圧勝した。

そして決勝戦に来た。

決勝はチームDだった。

Bとの戦いでは山本の力任せなプレイが目立ったが、林田と互角に戦っていた・・・

正直恐ろしかった・・・

ついに決勝戦というところに来た、序盤では沢西のスーパープレイがさく裂した。

それはスリーポイントシュートが10本連続で決まったのだった、しかも沢西のディフェンス

は山本だったのだ、自分よりも22センチも身長が高い選手でも沢西は止められないのだ・・・

一方彰は、ベンチであった

ベンチの真実

彰はその時ベンチに座っていた・・・

そのわけは、右小指の骨折・・・

担任の狭間先生のように黒板を殴って割ろうとして指を骨折したのだった・・・

もう一か月も試合に出れない彰は今までになくしょんぼりしていた。

彰は家で筋トレに励んだ！！

そして今年初の練習試合がやってきた、しかし彰はもちろん試合に出ることができない・・・

スタメンはC2メートル30センチ体重130キロ名前は赤木ヒロシさん

PF 山本 SF 沢西 SG 二戸 PG 安田

一年が大勢出ているのに、自分は出れない孤独感に彰は悩まされていた。

相手は名門竹園学園・・・

竹園には彰の知っている選手がいっぱいた、中でも青木レイという選手は幼馴染で

顔見知りだった。自分が出てない試合にレイが来るのは彰はすごく嫌だった・・・

彰「高下先生、試合に出してください」

高下「何を言ってるんだ、お前はケガしてるだろう・・・」

彰「最後のクォーターだけでもお願いします」

高下「これはお前のバスケ人生がかかっているから言うておく、やめておけ」

彰「じゃあラスト一分だけでも」

高下「どうなってもしらんぞ」

登場バスケットマン

登場した、井上彰だが自分でもわかっていたシュートは一本しか打てないと・・・

交代でコートに入ると、レイに一言かけられた。

レイ「同じ一年でも扱いつてもんが違うな」

彰は試合に集中し始めた。

相手からのスローインだった。

スローインされたボールが安田がカットして、沢西にパスを出した。

そこで彰は、パスを望んだ！

しかし沢西はシュートフォームに入った・・・

誰もがシュートとおもったのだが、彰にパスが来た！

彰は走り出した・・・フリースローラインからジャンプ・・・

ゴールにボールをぶち込んだ・・・

「プーーーーーッ」

急に笛が鳴った・・・

「オフエンスチャージング」

彰「やっちった・・・」

またスロインは相手からだった・・・

またもや同じことが起こった・・・

沢西はは普通にパスを出した。

彰「今度こそ・・・」

今度はスリーポイントラインから打った、レイの手の上を通過して行った。

「パスッ」

「ピーッ」

試合が終わった・・・

湘南87竹園76

これからも彰の療養生活は続くのだろうか・・・

終生のライバル

それから筋トレを初めて15日が経った。

彰の指もかなり良くなっていて、3日後には、練習していいようになっている。

家で筋トレしているとインターホンが鳴った・・・

「一緒に走れへん？」

声の主は林田だった、林田は憎らしい奴ではあるが、こういったかわいところもあるのだ

すぐ外に出てみると、仲良しの安田がいなかった。

いつも二個一の2人が離れていたのだった。

彰「いいけど、安田は？」

林田「あいつは今日東京行ってんねん！」

彰「そうなんや、どっはしるの？」

林田「じゃこつから12キロ走る！」

彰「オツケー」

彰「えっほえっほえっほ」

林田「えっほえっほ」

・
・
・
・
・
・
・
・
2人「ハアハア」

林田「さすがにきつすぎたな・・・ハッハッハッハッハ」

彰「なんだよ気持ちわりーな・・・」

林田「テメーと仲良くなりたくてさ・・・」

彰「俺たち仲良くなっても、ライバルだぞ!!」

林田「おう、もちろんじゃねーか」

彰「まっ勝つのは俺だけど・・・」

林田「俺に決まってんだろ!!」

こうして2人は仲良くなった、2人の友情は、湘南高校バスケット部を強くしていくであろう・・・

安田・・・

安田「クソッ！」

林田「どうした？」

彰「林田、行こうぜ！」

林田「お、おう・・・」

林田「安田のヤローどうしたんだろっな？」

彰「何か変なところあったか？」

林田「アイツここ最近イライラしててよ・・・」

彰「そっいゃ、そっだな。」

・・・一方安田は・・・

安田「彰のヤロー、俺ら2人の邪魔ばっかしやがってー!!」

山本「どうしたんだ？」

安田「井上のヤローが気に入らなくてよ・・・」

山本「そうか？俺はアイツ嫌いじゃねーけど・・・」

安田「だってさ・・・」

安田は一部始終を話終えた。

すると山本は言った。

山本「いつそのこと、井上とも仲良くしてみれば？」

安田「そんなの嫌に決まってるだろ・・・」

安田は天邪鬼であった・・・

次の日・・・

安田「井上ってさ、好きなNBA選手いるか？」

井上「ああ、俺が好きな選手はマイアミ・ヒートのレブロン・ジェームスだぜ！安田は？」

安田「俺はアレン・アイバーソンだ、アレンはボール運びがうますぎる・・・！」

ガシャーン・・・

高下「練習試合が決まった、相手は陵北高だ！」

一同「ウオッス！！！！！！」

高下「井上はもう右手大丈夫なのか？」

井上「ハイ!!!」

練習試合の日

高下「スタメンを発表する、C林田PF山本SF井上SG大出PG
安田・・・一年中心のメンバーで行くからな！」

陵北のスタメン発表

C坪井197センチPF山田195センチSF白石友佑198センチSG太田187センチPG172センチ。

高下「このチームに勝たないとインターハイはないぞ!!!」

一同「ウオツス!!!」

それは、春の終わりを告げるかのような、雨が降っている午前であった

白石友佑登場

審判「ジャンプボール」

ジャンプボールは林田が取った、林田が大出にパスを出した。

大出「ないパス!!」

彰「くれ!!!」

パスをもらった彰はすぐさまシュートを打った!

「パス」

スリーポイントシュートが決まったのであった。

高下「ほう・・・」

相手のPGにボールが渡り、PGの安田がディフェンスに着いた。

「シュツ」

スティールが決まったのだった、そして安田は速攻でゴール下に駆け込んだ、そしてレイアップシュート・・・

「バシン!!」

ブロックショットされたのだった。

安田「クソ、俺についてくるなんて上級生か・・・」

白石「一年だ、お前と同じ・・・」

安田「何一年だと・・・」

大出「パス回していこー!!」

一同「ウオッス」

安田の足の速さは県内屈指のトップクラスなのに止められたのだっ
た・・・

さてこの白石友佑とは何者なのだろうか・・・

ダンカー林田

パス、パス、パス・・・

たった今白石友佑のスリーが3本連続で決まった・・・

白石友佑は隠れた天才プレイヤーとして、中学生の時一部の奴にだけ有名になった奴であった。

沢西と渡り合えるのは白石しかいないといっても過言ではないのだが、沢西は今日風邪で休んでいたのだった。

それに気づいていた湘南生はまだ一人もいなかったのであった。

ただ今の得点は湘南12陵北27であった、まだ1クォーターなのにここまで点差がついていた・・・

もう勝ち目はないと思った、湘南であったが、ここにきていまだに一人闘志を燃やす男がいた。

安田「さあ、一本行こうか？」

安田はPGをすんなり抜き去り、白石が近づいてきたのだった、そこで安田はパスを出した。

相手は彰でもなく、大出先輩でもなく、山本でもなかった・・・

林田だった、林田はでかい図体を生かし、センタリングプレイに入った。

そこから、垂直跳びでダンクに行った。

「ドーン」

周りは静まり返った・・・

そこから湘南は巻き返しを図り、試合終了間際には78対75 陵北
リードまで勝負を持ち込んでいた。

最後の1分となった、ボールは陵北ボールであった・・・

ラスト1分

白石「ゆっくり攻撃していこうぜ!！」

「パシッ」

またもや安田のステイルが決まった。

安田「攻めるぞ!！」

一同「おう!！」

素早いパス回しだ、彰がまたスリーポイントラインに立ってパスを要求している。

パスを出した、キャッチアンドリリースで打った……………

「ガンガンガンガン……シュ」

観客「入ったぞー!！」

白石「落ち着け、まだ同点だ!！」

白石はゆっくりドリブルをついている、そーこーしてるうちにもう30秒しかなくなっていた。

白石はスリーポイントラインから打った、パス!!!

陵北監督「もうインサイドはいいから、アウトサイドを完璧に固め

る!！」

残り10秒

彰はいいポジションを探しているが、ディフェンスがきつくてシュートに行けない・・・

ビーーーーー

ついに笛が鳴った・・・

彰が打った、バシン・・・

ブロックされたのであった・・・

相手はもちろん白石であった。

栄光のダブルダנק

陵北戦から、3日が経ち彰は体育館にいた。

「シュツ！」

「パスツ……」

「ハアハア……」

高下「どうしたこんな時間まで練習か？」

時計の針は10時を指している。

彰「……」

高下「お前はまだ1年だし、まだ大会も終わっていない……」

高下「頑張れ……井上！」

彰「先生今度の試合はいつですか？」

高下「来週の土曜日に、大阪の不歩学園と試合を組んである。」

彰「不歩学園って弱小じゃないすか？」

高下「相手を知らずして試合には勝てん……」

高下「不歩は今年、大阪最強とまで言われているチームだ！」

彰「そうなんすか。」

彰「でも負けないっすよ！なんたってこっちには最強のメンバーがそろってますから！」

高下「陵北戦も沢西が来ていたら勝ってたのに……」

彰「俺らでは力不足ってコトっすか？？」

高下「うちの最強オーダーは決まっているだろ？」

彰「不歩のエースは誰っすか？」

高下「北……北というやつだ！」

高下「しかし、不歩はディフェンスのいいチームだ！」

彰「まあそう知っちゃ練習あるのみですわ！」

高下「もうそろそろ帰るんだぞ？」

彰「ウツス……！」

この後も体育館からはボールを突く音が聞こえていたという・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3919s/>

ダブルダンク

2011年10月8日23時23分発行